

平安朝初期の訓点語に用ゐられたスラとダニ

大坪, 併治
島根大学教授

<https://doi.org/10.15017/12331>

出版情報 : 語文研究. 10, pp.11-18, 1960-05-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

平安朝初期の訓点語に用ゐられたスラとダニ

大 坪 併 治

スラとダニは、意味のよく似た副助詞である。上代のスラとダニは、万葉集にしか例がなく、ダニ七十二、スラ二十八で、凡そ三対一の比でダニがスラより多い。平安朝に入ると、この差は一層著しくなり、和歌以外の散文では、専らダニを用ゐてスラを用ゐず、スラの意味をもダニが兼ねるやうになつた。しかるに、初期の訓点語では、ダニよりも却つてスラを多く用ゐた。加点年代明白な点本で、最古の資料といはれる成実論天長点、これと同種の飯室切金光明最勝王経註釈古点、山田本妙法蓮華経古点、及び成実論天長点に次ぐ古い資料で、同じ系統に立つ根津本大乘掌珍論承和・嘉祥点などの、一群の点本を見ると、スラを示す特定のヨコト点はあるが、ダニのヨコト点はない。これは、スラが特定の記号を必要とするほど頻用されたのに対し、ダニはそれほど多く用ゐられなかつたことを示すものである。実際、わたしが、左記の資料から集め得た用例は、スラ七十七、ダニ三十一ではば五対二の比で、スラがダニより多い。

小川本・麻生文庫本・岩淵本願經四分律古点四卷
東大寺本成実論天長点三卷
山田本妙法蓮華経古点一卷
西大寺本金光明最勝王経古点十卷（春日博士による）
根津本大乘掌珍論承和・嘉祥点一卷
石山寺本大智度論天安点十七卷
石山寺本瑜伽師地論古点十一卷
東大寺本地蔵十輪經元慶点六卷
東大寺本金剛般若経讚述仁和点一卷
山田本弥勒上生経讚古点（白）一卷
石山寺本大般涅槃経古点（丙）十卷
石山寺本蘇悉地羯羅経略疏寛平点二卷
わたしは、これらの資料を、スラとダニの用例を求めするために読んだのではなく、全般的な調査の間に、たまたま気付いたものを拾ひ集めた程度であるから、仔細に検討すれば、右の数字はいくらか殖えるかもしれない。ただし、両者の勢力比は大して変わるまいと思はれるから、本稿では、右の数字を基にして論を進めることにする。

さて、訓点語で、このやうにスラを多く用ゐるのは、単に伝統性の故に、上代の文法を伝へただけではなく、訓点語そのものの特殊事情も手伝つてゐるやうである。

二

先づ、訓点語で、スラ・ダニの現はれる構文を見ると、次のやうに色々な場合がある。

A 後に「況・何況」などを伴ふ文の「尚」の前または後に補読するもの。

B 後に「云何」を伴ふ文の「尚」の前または後に補読するもの。

C 後に「寧」を伴ふ文の「尚」の前または後に補読するもの。

D 後に「況・何況・云何・寧」などを伴はない文の「尚」の前または後に補読するもの。

E 「尚」がなく、後に「況・何況」などを伴ふ文に補読するもの。

F 「尚」がなく、後に「云何」を伴ふ文に補読するもの。

G 「尚」がなく、「寧」を持つ文に補読するもの。

H 「尚・況・何況・云何・寧」などのない文に、文意によつて補読するもの。

(以上、「尚」の代りに、稀れに「猶・猶尚」を用ゐることがある。)

わたしの集めた用例を分類すると、次の如くである。

(第一表)

ダニ	スラ	
9	59	A
0	2	B
1	0	C
1	4	D
0	5	E
1	1	F
1	0	G
18	6	H
31	77	計

即ち、スラを最も多く用ゐるのはAであり、訓点語にスラの多い原因は、ここにあると考へられるので、以下Aを中心として、スラとダニの用法を調べてみよう。

Aは、ある事から甲を挙げて、他の事柄乙と対比する構文である。叙述の重点は乙にあり、甲は乙を引き出す材料、いはば例とも見られるものである。それ故、甲にスラ・ダニを含むこととなるが、「尚」はナホまたはナホシと読み、甲の中の対比の中心となるべき語にスラまたはダニを補読する。甲の記述が肯定的判断か否定的判断か、または、対比の中心となるべき語が、「尚」の前にあるか後にあるかによつて、Aを更に次の四種に分けることができる。

a 甲が肯定で、対比の中心となるべき語が「尚」の前にあるもの。

b 甲が肯定で、対比の中心となるべき語が「尚」の後にあるもの。

c 甲が否定で、対比の中心となるべき語が「尚」の前にあるもの。

d 甲が否定で、対比の中心となるべき語が「尚」の後にあるもの。

ただし、ここで「否定」といふのは、内容的に見た否定であつて、形式的な否定ではないから、次のやうに、文法上は肯定表現に属するものであつても、否定として取り扱ふ。

(1) 声聞道果 尚無。何況有スラ。仏道スラ。(大智度論天安点 卷八十六 187)

(2) 如スラ 尚不可得。何況住スラ。如得スラ 阿耨多羅三藐三菩提スラ。(同 卷六十四 1623)

(3) 未來世 未有。念知スラ 尚難。何況眼見スラ。(同 卷六十七 2113)

さて、前記Aの例を、右の分類に当てはめて整理すると、次の如くである。

(第二表)

	スラ	a	b	c	d	計
ダニ	2	13	0	3	4	9
	2	2	38	6	59	

即ち、肯定の a・b では、殆んどスラだけが用ゐられ、否定の c・d では、スラ・ダニが共に用ゐられるが、対比の中心となるべき語が「尚」、の前にある c では、スラが圧倒的に多く、「尚」の後にある d では、その差は比較的少いといふことができる。その例――

(4) 是スラ 法スラ 中スラ 諸法スラ 法相スラ 尚空スラ。況有スラ 我スラ 而スラ 決スラ 定スラ 取スラ 諸法スラ 相スラ。(大智度論天安点 卷六十二 1215)

16) a

(5) 犯スラ 二性罪スラ 一者スラ 尚スラ 応スラ 如スラ 是スラ。況犯スラ 其スラ 余スラ 小スラ 遮スラ 罪スラ。(地藏十輪經二元慶点 卷四 75) a

(6) 得スラ 二人身スラ 二スラ 但不スラ 行スラ 善スラ 尚スラ 為スラ 二大スラ 失スラ。況起スラ 惡業スラ。(成実論大長点 卷十二 146) a

(7) 此スラ 中スラ 尚スラ 与スラ 下スラ (中略) 諸スラ 外道スラ 欣スラ 求スラ 善說スラ 離スラ 慳スラ 嫉スラ 者スラ 上スラ 広スラ 興スラ 二スラ 諍論スラ。何況スラ 同スラ 趣スラ 二スラ 乘スラ 一スラ 諸師スラ。(大乘掌珍論承和・嘉祥点 107) b 別訓 外道スラ 諸師スラ。(大)

(8) 我スラ 尚スラ 知スラ 二布施持戒等スラ 之恩スラ。何況スラ 般若波羅蜜スラ。(大智度論天安点 卷七十 139-10) b

(9) 小兒スラ 姪スラ 尚スラ 無スラ。況能スラ 姪欲スラ。(成実論大長点 卷十五 615) c

(10) 愚スラ 人スラ 於スラ 二スラ 淺近スラ 法スラ 猶スラ 尚スラ 難スラ 悟スラ。何況スラ 甚深スラ 因緣スラ。(大智度論天安点 卷一 620) c

(11) 若スラ 諸法スラ 実定スラ 尚スラ 不スラ 應スラ 作スラ 貪欲スラ 瞋恚スラ 罪スラ 因緣スラ。何況スラ 虚誑スラ 無スラ 実スラ。(同 卷九十 105-7) c

(12) 若スラ 人見スラ 色スラ 修スラ 道スラ 尚スラ 無スラ。何況スラ 能スラ 得スラ (中略) 断スラ 煩惱スラ 習スラ。(同 卷八十六 1820) c

(13) 士夫スラ 補特伽羅スラ (中略) 初スラ 尚スラ 不スラ 能スラ 住スラ 二スラ 食スラ 欣樂スラ。(同 卷二十三 525) c

(14) 十方世界スラ 中スラ 尚スラ 無スラ 二スラ 乘スラ。何況スラ 有スラ 三スラ。(妙法蓮華經 卷一)

華經古点 511) d

15) 是の諸菩薩 尚不下悔^二求 般涅槃^一 故 勤 修中梵行上。

況復欣^二樂 三界 生死^一。(大乘掌珍論承和・嘉祥点

1512) d

16) 行^二布施 輪^一、尚^レ不^レ能^レ滅^下 自身 所^レ有 少分

苦惱^上。況能 除^二滅 一切 有情 無量 苦惱^一。(地藏

十輪經元慶点 卷九 910) d

17) 是 漏^二尽 人 煩惱 根斷 尚^レ不^レ起^レ心。況當^レ

祝 邪。(成実論天長点 卷十二 1123) d

18) 若諍訟曠志 尚不^レ得^レ生^二天人 中^一。何況涅槃^一。

(大智度論天安点 卷八十三 1123) d

19) 以^レ有^レ尽 故 尚不^レ能^レ得^二小乘 涅槃^一。

何況無上道。(同 卷六十二 631) d

20) 若有^二法相^一者 尚不^レ得^レ順忍^一。何況得^レ道。(同

卷八十七 1213) d

これについて、わたしは次のやうに考へる。

一、上代のスラは、一事を挙げて他を類推させる意味を持ち、ダニは、すべてを讓歩した最後の一線を表はした。スラは、「他のことはいふまでもなく何々さへも」といふ氣持であり、ダニは、「他のことはともかくせめて何々だけでも」といふに近かつた。ところで、Aは、甲を例として、乙がそれ以上であることを強く敘述する構文である。このやうな場合に用ゐられるものとしては、ダニよりもスラが相応しい。万葉集に

○夢のみに見尚幾許恋ふる吾はうつつに見ては益而如何有

(卷十一・二五五三)

とあるのは、国語として最もAに近い表現であり、Aにおいて、スラがダニより適切であることを示してゐる。

また、加納協三郎氏の「『だに』『すら』の用法上の差異に就て」(国語と国文学・昭和三十二年六月号)によれば、上代のスラは「確定の事実」を表はす語に続き、ダニは、「未定事実に対する表現者の主観的態度・意向を表はす語」に続いたといふ。ところで、甲は、既定の事実または当然予想さるべき事がらであつて、未定事実や單純な推定・希望などではない。例へば、甲の中に推量の助動詞を含むことは極めて稀れであるが、それも、ベシ・マジのやうな客観的推量を表はすものに限られ、ム・シのやうな主観的推量を表はすものは用ゐられない。

21) 般若波羅蜜品 尚不^レ能^レ談 論天安点 卷百 1410) d

22) 小信 尚不^レ得^レ 出家 道果^一。(同 卷一

1013-14)

このやうな場合に用ゐられるものとしては、やはりスラがダニより適切である。

それ故、Aにおいては、全体としてスラがダニより多く用ゐられることになつたのであらう。

二、万葉集の例を見ると、否定には、ダニがスラより多く用ゐられてゐる。ダニは、七十二例中二十一例、即ち約三分の一が否定に用ゐられてゐるが、スラは、二十八例中三例、即ち九分の一しか否定

に用ゐられてゐない。平安朝初期の訓点語でも、完全に補読する場
合、即ちHを見ると、ダニは、十八例全部が否定を表はす語に続
き、スラは、六例中二例しか否定を表はす語に続いてゐない。

23 汝云何病乃使レ無レ^(せしかば)有^(あ)二^(ふた)創^(もり)一^(ひと)。
24 斯等共一^(ひと)心^(こころ)於^(お)蓮華經^(れんげきやう)四^(よ)分^(ぶん)律^(りつ)古^(こ)点^(てん) 甲^(か)卷^(まき) 23(2)

25 於^(お)二^(ふた)生死^(しんじ)不^(ず)見^(み)二^(ふた)少^(せう)分^(ぶん)戲^(ぎ)論^(ろん)過^(あ)失^(し)一^(ひと)。不^(ず)見^(み)二^(ふた)少^(せう)分^(ぶん)所^(ところ)レ^(を)有^(あ)過^(あ)患^(わづらひ)一^(ひと)。亦^(また)復^(また)不^(ず)能^(な)二^(ふた)少^(せう)分^(ぶん)の^(の)厭^(いと)離^(り)一^(ひと)。^{(瑜伽師地論古}

点 卷二十一 613-14)
26 外^(そと)諸^(しよ)巧^(たか)師^(し)受^(う)学^(がく)弟^(てい)子^(し) 亦^(また)有^(あ)三^(さん)恭^(こう)二^(ふた)敬^(けい) 於^(お)師^(し)一^(ひと)。(小
川本願經四分律古点甲卷 812)

27 仏已^(ぶつ)曾^(ぞう)世^(せい)世^(せい) 教^(きやう)二^(ふた)化^(か) 如^(ごと)レ^(し)是^(ぜ) 等^(とう)一^(ひと) 皆^(みな)一^(ひと) 心^(こころ) 合^(あ)レ^(は) 掌^(てう) 欲^(よく) 三^(さん) 聽^(き) 二^(ふた) 受^(う) 仏^(ぶつ) 語^(ご) 一^(ひと)。(妙法
蓮華經古点 325-26)

28 我^(わが)今^(いま)自^(みづか) 於^(お) 智^(ち) 疑^(ぎ) 惑^(わく) 不^(ず) 能^(な) 了^(しやう) 了^(しやう)。(同 33) 別訓
智^(ち) 二^(ふた) 於^(お) テスラ

29 若^(し) 後^(ご) 一^(ひと) 因^(いん) 先^(せん) 果^(くわ)、 因^(いん) 自^(みづか) 未^(ま) 生^(せい)。云^(い) 何^(なに) 生^(せい) 果^(くわ)。(成実論天長点 卷十七 510)

また、加納氏の前記論文によれば、上代のダニは、否定の場合に
限り、確定事実を表はす語にも続くことができたといふ。
○かくのみや吾が恋ひをらむぬば玉の欲流乃比毛太爾解き放けず
して(万葉集 卷十七・三九三八)

○たぶれたる醜つ翁の許等太爾母吾には告げず、(同 卷十七・
四〇一)

それ故、Aも、否定の場合には、ダニの用ゐられる可能性があるわ
けであり、従つて、肯定の a・b には、殆んどスラだけが用ゐら
れ、否定の c・d には、スラ・ダニが併用されることになつたので
あらう。肯定でダニを用ゐたのは、前掲(6)と、次の例とである。

30 説^(せつ) 下^(か) 未^(ま) 惡^(あく) 世^(せい) 尚^(なほ) 有^(あ) 二^(ふた) 衆^(しゆ) 生^(せい) 一^(ひと) 能^(な) 生^(せい) 中^(ちゆう) 實^(じつ) 相^(さう) 上^(じやう)。(金剛般若經
讚述仁和点 3518-19)

「未」の右には、白墨で一字漢字が書きつけられてゐるが、何と読
むか分らない。大正新修大藏經の校異を見ると、「未十(来)カ」とあ
る。「来」の字を補つて「未(来)の惡世」と読むべきか——といふこ
とらしい。「生」の左には反点の「一」が、「説」の左には反点の
「二」があるが、「未」には反点がない。仮りに「未」を「未来」
の意に解し、反点に従つて「生」から「説」に返つて読んでおい
たが、余り確実な例ではない。(6)は、全体としては肯定判断であ
るが、対比の中心となる「善を行(せ)ぬ」が否定であるため、これ
に引かれてダニを用ゐたのであらうか。いづれにしても、ダニの全
用例三十一の内、ダニを肯定に用ゐた唯一の確実な例として、注目
すべき例外である。

三、万葉集には、「尚」をナホまたはスラと読ませた多くの例が
ある。これは漢文訓読の際、A・Dのような「尚」をナホと読み、
その前後にスラを補読する習慣が早くから一般化してゐたことを示

すものである。ところで、Aについて考へると、aでは、対比の中心となるべき語が「尚」の前にあるから、これにスラを補読すれば、スラの直ぐ後にナホ(尚)が来ることになって、両者の関係が緊密になり、——スラ・ナホの慣用句が成立しやすい。これに對し、bでは、対比の中心となるべき語が「尚」の後にあるから、これにスラを補読しても、両者は常に他語によって切斷されることになり、——ナホ——スラの慣用句は成立しにくい。それ故、Cでは、——スラ・ナホの慣用句に支へられて、スラとナホとの結合が否定に勝ち、スラがダニを圧して多く用ゐられたが、dでは、否定がスラとナホとの結合を破つて、比較的多くダニが用ゐられることになつたのであらう。

わたしは、以上の如く考へることによつて、第二表の示す事實を説明することができ、また、訓点語で、特にスラの多い特殊事情をも理解することができると思ふ。繰り返していへば、まづ、Aそのものが訓点資料に頻出すること、この構文にあつては、本来スラがダニより適切であること、Aの大半を占めるa・cでは、——スラ・ナホの慣用句が守られ、習慣的にスラの用ゐられる傾向があつたことなどのため、上代以来の一般的傾向に反し、訓点語ではスラがダニより圧倒的に多く用ゐられることになつたのである。

なほ、第一・第二表のスラにはスラモを、ダニにはダニモ・ダモを含んでゐることを注意しておきたい。上代のスラには、スラ・スラニ・スラモの三形があつたが、訓点語では、スラニは全く用ゐずスラモは極めて稀れに用ゐられた。(26参照)ダニには、ダニ・ダニモの両形があり、ダニをダニモより多く用ゐたが、訓点語では、却つ

てダニモ・ダモをダニより多く用ゐ、その比は四対一であつた。ダニモはダニモの音韻変化したもので、従来考へられてゐたよりも、遙かに早く現はれてゐる。

31) 彼(に)比丘尼有(り)疑、不下敢(て)在(る)水(の)上(に) 則(ち)大小便(を)

上(に) (麻生文庫本願經四分律古点 24 17)

32) 我慢(を)自(ら)矜(を)高(く)語(を)曲(を)マ(を)心(を)不(レ)實(を)、於(に)二千万億劫(を)

二不(レ)聞(二)仏(一)名字(一) 亦不(レ)聞(二)正法(一)。(妙法蓮華經古

点 75 16)

33) 夢(を)中(に)未(だ)曾(も)不(レ)見(る) 仏(を)。(大智度論天安点 卷

百 2 14)

34) 若有(は)相(を)行(は)し 施(を)尚(も)不(レ)得(る) 二十王(を)報(を) 寧(も)得(る) 二 仏(を) 善提(を)

一。(金剛般若經讚述仁和点 19 14 | 15) (第一表Cの例)

なほ、32)の「処ダも」参照。

三

以上述べたところは、春日政治博士が、「古点の況字をめぐる(古訓点の研究 三)」の中で言及された、スラ・ダニの用法に關するお説によつて導かれたものである。博士のお説を要約すると、次の如くである。

一、「尚」の前にはスラを多く用ゐ、「尚」の後にはダニを用ゐる。「尚」の前にダニを用ゐた例は稀れにあるが、「尚」の後にスラを用ゐた例はない。

二、スラは、低度もしくは高度の一事物を提示して、他を推測させる義で、現代のサへに當り、ダニは、提示する一事物に限つて他

を予想しないのが本義で、現代のダケに当る。それ故、「尚」の前後に読み添へるものとしては、本来スラの方が適切であった。

三、しかるに、平安時代に入り、ダニの使用が増加し、従来スラの表はしてゐた意味をもダニが表はすやうになつて、後に「況・何況」などを伴ふ「尚」の前後にも、スラに代つて用ゐられ出した。

四、ただし、「尚」の前では、スラとナホとの結合が強く、依然としてスラが用ゐられ、「尚」の後では、スラとナホとの結合が弱く、ダニは容易にスラに代ることができた。

わたしは、この説を読んで、始めて訓点語におけるスラ・ダニの用法を教へられ、「尚」をめぐる両者の使ひ分けに心を惹かれた。

そして、古点本を繙く度に、注意してその用例を集めるやうになつたが、今これを整理してみると、すでに述べたやうに、博士のお説とは、幾分異なる結果が現はれた。このやうな相違を齎した主な原因は、博士の教へに従つて、スラ・ダニの用法を、「尚」の前後に二分した上、更に、肯定と否定との区別を導入して、分類をより詳しくしたことにあるやうである。本稿の論旨を一層明白にするため、博士のお説に対し、敢へて批評を試みさせて頂かうと思ふ。

一、「尚」の前にスラを多く用ゐるのは事実であるが、「尚」の後にはダニを用ゐてスラを用ゐないといふのは誤りである。わたしの集めた例では、「尚」の後に用ゐられるものは、スラ八、ダニ四で、やはりスラが多い。それも、ダニが比較的多く用ゐられるのは、否定の場合に限るのであり、肯定の場合には、却つてスラを用ゐてダニを用ゐない傾向がある。因に、小林芳規氏の「古点の況字統詔」(東洋大学紀(要第十二集))に、西大寺本不空羼索神呪心經寛徳二年点か

ら

〇是(の)如き衆生、斯の呪力に由て尚^論現に輕受(し)て、重罪をスラ消除す。呪や余の有情の身心清浄にして此の呪を開持せむ(は)而も福を獲サ^エラ(ム)不^ニヤ。

の例を引き、「尚」字の下にスラが用ゐられており、古用のダニとある表現に反する。(五五頁)とあるのは、博士のお説を踏襲されたための誤解ではないか。これは、わたしの分類では、bに属するもので、当然スラが用ゐらるべきであり、むしろよく古用を保つてゐる例と見られる。

二、Aの構文においては、博士のお説のやうに、意義上スラがダニより適切であると思はれるが、否定の場合に限り、ダニもまた用ゐられる可能性があつた。

三、Aにダニの現はれる事実を、博士は、平安時代に入つて、ダニの使用が増加し、ダニがスラの意味を兼ねるやうになつた結果と見られたが、もしさうだとすれば、ダニは、肯定・否定の区別なく用ゐらるべきである。しかるに、実際には、ダニは、肯定には殆ど用ゐられず、主として否定に用ゐられる傾向がある。これは、時代の推移に伴つて、ダニの意味が変化し、「スラの位置を奪ひ尽した」ためではなく、むしろ、ダニ本来の用法として、否定の場合に限りAの中に入り込むことができたと解すべきである。ダニの全用例三十一、その内二十九までが否定であり、殊に直接原文の影響を受けないHの十八例全部が否定であることに注意したい。わたしは、Hに見られるスラ六、ダニ二十八の開きが、訓点語以外の国語における両者の勢力比を、比較的忠実に示してゐるものと考へ、平安

朝初期にあつては（点本以外の国語資料は、実際には殆んど現存してゐないが）、ダニがスラを圧して多く用ゐられてはゐるが、いまだスラの位置を奪ひ尽すに到らず、なほ用法上の相違を保つてゐたと想像する。

四、「尚」の前と後とでは、ナホとスラの結合の度合が違ふから、ダニが入り込むのに難易の差があるといふのは、首肯すべき説明であり、わたしもこれに従つた。

五、聖語藏本菩薩善戒經古点から引かれた

○少物ダニ尚シ施ス。何ニ況ヤ多有ラムヲハ。(古訓点の研究) (二九二・三九九頁)
は、(6)と共にダニをaに用ゐた注目すべき例外である。確かに上代のダニにはなかつた用法で、ダニがスラに代り始めたことを示すものであらうか。ただし、博士自身、ダニを「尚」の前に用ゐた例の中に加へてゐられないのは不審である。

初に記したやうに、平安朝初期の訓点語といつても、本稿で取り扱つたものはその一部に過ぎず、調査すべくして調査できなかつた資料も少くない。殊に、正倉院関係のものは全く未見であるから、その中にどんな例外が潜んでゐるか分らない。しかし、目下のところ、どうにもならないことなので、わたしはわたしなりに、可能な範囲で用例を集める他なかつた。それにも拘らず、本稿が、訓点語のスラ・ダニの用法を明らかにするために、少しでも役立つところがあるとすれば、それは、偏へに博士のお説によつて啓発された賜である。

わたしは、先に、春日博士の「古訓点の研究」の書評を書かせて頂いた折、「博士にとつては、出席簿に載らざる学生である。」と

いつた。実際、わたしは、京都大学在学中から、二十数年に亘つて、博士の御指導を仰いで来た。京大楽友会館で、始めて博士の講演——国語資料としての訓点の位置——を拝聴した時のこと、卒業論文の作製に当り、禁止詞マナの語序についてお伺ひしたのに対し、懇切丁寧な御返事を頂いた時のこと、また、朝鮮からの帰途、馬屋谷のお宅に参上し、故大矢透博士から引き継がれた資料や、博士自らお集めになつた資料などについて、点本の調べ方と訓点語の取り扱ひを、細々とお教へ頂いた時のことなど、わたしは、今もその日と同じ感激をもつて思ひ出すことができるのである。福田良輔教授からのお手紙によると、博士は今年八十の賀をお祝ひになり、これを記念して本誌が特輯されることになつた由であるが、博士の御指導を仰いだ一人として、このおめでたい誌上に、拙文を載せて頂くことは、まことに光栄であり、無上の喜びである。山陰の水都より、遙かに、博士の御健在をお祈りし、変らざる御指導をお願いして、この稿を了る。

——島根大学教授

付記一、本稿で点本を引用する場合には、本文の文字はすべて現行の活字体に改め、ヨコト点は平仮名、仮名訓は片仮名、実字は平仮名の右に傍線を引き、私意による補説は平仮名を()で包んで表はし、反点も後世の形式に改めた。なほ、用例の出典を示す分数は、分子が料紙の枚数を、分母が行数を示す。

二、本稿は、昭和三十三年十一月二十三日、広島大学文学部で開かれた国語学会中国四国大会で行つた講演、「平安朝初期の訓点語に伝へられた上代の文法」の一部を詳説したものである。 昭和三十四年十一月十五日記